

市立横須賀病院医師・林信雄博士関係史料の紹介

藤井 明広

Historical Documents of Dr. Nobuo Hayashi, a Former Doctor at Yokosuka City Hospital

FUJII Akihiro

本稿では、市立横須賀病院のレントゲン医師であった林信雄医学博士の日本医学界および横須賀市における功績とともに、当館が所蔵する関係史料についてその概要を紹介した。その結果、当該史料からは、市立横須賀病院の医師として、また長く横須賀市に住んだ古参の横須賀市民として社会福祉やスポーツ振興など幅広く社会に貢献した林博士の事績がうかがえた。

This article introduces the achievements by Dr. Nobuo Hayashi, a former X-ray doctor at Yokosuka City Hospital, and the related historical Documents preserved in Yokosuka City Museum. The historical materials revealed that Dr. Hayashi had been widely contributed to the society, including social welfare and sport promotion as a doctor at Yokosuka City Hospital and an old-timer in Yokosuka.

はじめに

本稿は、市立横須賀病院の医師であった林信雄医学博士（1897-1964）〔以下、林博士〕の日本医学界および横須賀市における功績とともに、当館が所蔵する関係史料についてその概要を紹介するものである。なお、具体的な経歴については後述するが、林博士は大正 10 年（1921）以来、レントゲン医療の研究に従事し、現在では当たり前に行われている内臓器官（胃・腸・肺・心臓など）のレントゲン診断という新たな領域を切り開き、日本医学史上に偉大な功績を残した人物である¹。昭和 8 年（1933）から昭和 38 年（1963）に至る約 30 年間を市立横須賀病院（現・横須賀市文化会館所在地）で勤務し、レントゲン科医長や同病院長井分院長、野比臨海療養所長などを歴任した。一方で、長年の研究により放射線に身体をおかれ、両手の拇指を除く四本の指、さらには左腕を切断したが、それでも研究と診療を続けた²。また、全国肢体不自由児父母会評議員や横須賀市身体障害者後援会会長、横須賀市野球協会会長を務めるなど幅広い分野において活躍している。

原稿受付 2025 年 1 月 7 日 横須賀市 博物館業績 第 792 号

Key Word: Yokosuka City Hospital, X-ray doctor, social welfare, baseball

キーワード： 市立横須賀病院 レントゲン医師 社会福祉 野球

林博士の人となりについては「物質にも地位にも、また名声にも全く無欲の人」、「求める人ではなくて与える人」と評され、「医聖」や「聖人」とも称された³。しかし、自らの業績や行いを誇示することを潔しとしない林博士の性質もあり、現在ではその名前や事績を知る横須賀市民は少ないと思われる。そこで本稿は、横須賀市の医師であり市民でもあった林博士の事績とその遺志を現在、ひいては将来の横須賀市民に伝える機会としたい。

1. 林信雄博士の生涯

本節では、林博士の経歴を中心にその生涯について紹介する⁴。主な経歴および各種委員歴については【表1】・【表2】を参照頂きたい。

（1）生い立ち～千葉修学・勤務時代

林博士は明治30年（1897）4月8日、山形県鶴岡町新士町（現・山形県鶴岡市）に、父・光朝と母・竹以の次男として生まれる（長男は早世）⁵。父・光朝は小学校教員を務めたが、のちに実業に転じて織屋などを営んだ。母・竹以は藤島町（現・山形県鶴岡市）の山本家から嫁入りした人であり、同町の町長を務めた山本清一郎の妹である⁶。当時の林家は数町歩の田畑を所有し、それを耕作するための作男を雇うほどであった。しかし、林博士が5歳の頃に母・竹以が、13歳の頃に父・光朝が死去するなど青年期には両親と死別している。その後は継祖母・清栄（祖父である故・林信善の後妻で庄内藩御目見医久島元海の娘）の寵愛を受けて育つが、清栄もまた博士の成人を見ることなく死去している。以後は母方の実家である山本家に引き取られて育つこととなる。

林博士は明治43年（1910）3月に鶴岡町立朝暘第二尋常小学校を卒業し、同年4月に山形県立庄内中学校（県立鶴岡南高等学校を経て、現・県立致道館高等学校）に進学⁷。大正4年（1914）9月、千葉医学専門学校（千葉医科大学を経て、現・千葉大学医学部⁸）の入学試験に合格し、故郷鶴岡を離れることとなる⁹。そして、大正8年（1919）3月に千葉医学専門学校を卒業した林博士は、学内にある二つの内科のうち柏戸留吉教授のもとに入局¹⁰。大正10年（1921）2月より内科レントゲン学研修のため京都帝国大学医学部中央レントゲン室の浦野多門治講師のもとに内地留学し、翌大正11年（1922）5月に帰学した林博士は附属医院に内科レントゲン室を創設（大正12年（1923）4月1日より千葉医学専門学校が廃止され、千葉医科大学に昇格）¹¹。大正12年（1923）6月には千葉医科大学附属病院を辞して、名古屋市株式会社愛知理学療法所（大正13年（1924）に名古屋市医師会理学療法部）の所長に就任するが、大正15年（1926）6月にその職を辞して千葉医科大学助手となる。その後、昭和5年（1930）4月、博士論文「3-アスナルの中樞神経系に及ぼす薬理作用：猫に於ける一般作用並に其の部位的考察に就て¹²」を提出して医学博士の学位を授与される。さらに昭和8年（1933）5月には千葉医科大学講師に任命されているが、同年10月21日に千葉医科大学を辞し、11月23日より神奈川県横須賀市の市立横須賀病院に内科医長兼レント

ゲン科医長として就任することとなる。

（２）市立横須賀病院勤務時代

林博士は昭和 8 年（1933）から昭和 38 年（1963）までの約 30 年間を市立横須賀病院に勤務している。勤務先である市立横須賀病院は、関東大震災の翌年にあたる大正 13 年（1924）に開院した。開院当初はいわゆる震災直後のバラック建てのきわめて粗末な病舎であったが、昭和 4 年（1929）7 月にはモダン建築による病院の建設が着工され、昭和 6 年（1931）5 月に竣工した。林博士が正職を退く昭和 37 年（1962）には小児科、内科、外科、産婦人科、耳鼻科、眼科、放射線科などの診療科目を備えた病院に発展していた¹³。林博士は、この市立横須賀病院在職中、内科医長およびレントゲン科医長をはじめとして、市立横須賀病院長井分院長¹⁴、市立横須賀保健所長、市立横須賀病院野比臨海療養所長¹⁵なども兼任している。

林博士が着任した当時「博士のような放射線医学の権威は全国中にも稀れで貴重な存在であったから、病院内の医員はもちろんのこと、三浦半島一円の医師たちは、競って博士の室を訪れてその指導を乞うというあり様¹⁶」であった。対する林博士もまた「暇さえあれば労をいとわずに、遠くまでも出向いて親切にレントゲン医学の普及に当たっていたから、林博士の名声と人格とは期せずして横須賀市を中心として近郷に広まり、医師といわず、患者といわず林博士を訪ねる外来者はきびすをつらねるありさまであった¹⁷」という¹⁸。

さらに林博士は、横須賀市身体障害者後援会や肢体不自由児父母の会の活動を主導するなど社会福祉の分野にも積極的に携わっていた。横須賀市身体障害者後援会とは、林博士の主唱によって昭和 29 年（1954）11 月に発足した会である¹⁹。この後援会発足の経緯について横須賀市身体障害者連合会長などを務めた佐野義昭氏²⁰は「これ（※財政的に苦労を重ねていた身障者団体の状況）をみた林博士は見るに見かねて、何とか力になりたいと立ちあがったのである。博士が立ち上がったのは、自身も身障者で（多年にわたるレントゲン操作で、博士自身両肢を手首から切断するという重傷者であった）あったの故だけではない。もともと人道的精神のあついい人であったが、たまたま身障者の実態をみて、後援会の組織を思い立ったのである²¹」と記している。また、昭和 33 年（1958）には肢体不自由児父母の会の結成に携わっている。当時はまだ肢体不自由児の登録の不十分であったため、その対象児の調査から始められた。横須賀市において肢体不自由児の育成事業にあたっていた横須賀市基督教社会館の阿部志郎館長からその相談をうけた林博士は、横須賀市の福祉事務所に働きかけるなど援助を行っていた²²。会の運営にあたっては「林会長のポケット支出もあったかに察せられる節がある²³」と会費と篤志家の寄付によって運営される会を資金面でも援助していたようである²⁴。そのほか、昭和 36 年（1961）には全国肢体不自由児父母の会評議員、昭和 38 年（1963）には神奈川県肢体不自由児父母の会連合会常任幹事を務めるなど社会福祉の発展に貢献している。また、林博士はスポーツ愛好家であり、特に幼少期から野球を好んでいた。

千葉修学時代には選手として「いつも投手をつとめ、手拭いを帽子代りにキリッとしてマウンドに立ち、至極コントロールのよい鮮やかな投球で打者を三振に打ちとっていた²⁵⁾」という。市立横須賀病院に赴任してからも、野球に対する情熱は消えることなく、終戦直後の昭和 21 年(1946)には横須賀市野球協会を創立して、自らも会長や顧問となり終生活動に関わり続けた²⁶⁾。野球以外にも横須賀市ハンドボール協会会長、横須賀卓球協会顧問を務めるなど横須賀市のスポーツ振興に寄与した²⁷⁾。

一方で、林博士の身体に放射線の影響が現れ始めたのも市立横須賀病院勤務時代であった。市立横須賀病院長を務めた洲崎敬三博士は病状の進行とそれに対する林博士の様子について、「その頃の市立病院のレントゲン科は、先生の指導を受けるため、見学者でいつも賑わっていたものであります。いまにして思えば、その当時からすでに先生の指先は、レントゲン障害に冒された徴候が現われはじめていたのであります。第 1 回の手術は、たしか千葉大学医学部皮膚科でなされたように記憶しています。当時の切断された指は、現在千葉大学皮膚科教室に貴重な学術標本として保存されているはずであります。そののち昭和 30 年ごろから、前後 3 回にわたって、左の指先から次々と切断され、ついに左手首までも切断されるにいたったのであります。障害は更に右指にも波及し、右の人さし指一本を残すだけという痛ましい状態にまでこられたのであります(※原文ママ)。それゆえ、日常の起居にも非常に不自由であったにも拘わらず、先生はそんなことには少しも意に介しない様子で、ひたすらに研究と診療に没頭しておられるお姿は、まことに驚歎のほかなく、私ども普通人にはとうてい考えもおよばないことでありまして、正に犠牲的精神の権化とでもいうべきことでありましょう²⁸⁾」と述べている。さらに千葉大学名誉教授の佐藤伊吉博士もまた「林博士はレントゲン癌のため、結局左腕を切断し、右手も巻タバコを辛うじてつかめるぐらいに、拇指、小指を残したほかは全部を失った(※原文ママ)。この不幸な災害に対して博士はどんな気持ちでいたかといえば「それは予期されぬことではなかったが、自分のガムシャラの不注意の結果だから、自慢にはならない」と、平然として他人のことのようになされたのである。(中略)林博士は、その痛ましい災害に対処し、不屈不撓の精神をもって挑みたたかわれ、ついに天職に殉じて、専門医学の犠牲となり、一生をおわられたのである²⁹⁾」と述べている。

(3) 晩年の林博士とその臨終

昭和 37 年(1962)3 月 17 日午後 10 時 10 分頃、市立横須賀病院は東病棟二階からの出火により同病棟と本館の木造二階建てモルタル造りの建物、計 4500 m²が全焼した。当時病院には生まれたばかりの乳児 20 名や入院患者 108 名がいたが出火とともに救助されて、全員無事であった³⁰⁾。こうして勤務先である市立横須賀病院が焼失した年の 12 月 25 日、林博士は市立横須賀病院関係の正職を全て退いている。

昭和 38 年(1963)12 月には、故郷である鶴岡の有志により「林博士表彰記念文庫創設委

員会」(委員長田中一松³¹ [林博士と庄内中学校時代の同級生、東京国立文化財研究所長])が発足し、林博士の顕彰運動が開始される³²。この顕彰運動に対して林博士は「少しも喜ばれず、ただ最小限の好意を受ける印として、最も地味でしかも郷土後進のため有益であると考えられる記念文庫の設置にのみを受諾³³」した。当初は、林博士の胸像を造り「博士の因縁の地」に立てようと計画したが、「謙虚で銜い気のない博士」の許容するところとはならなかった³⁴。その結果、「庄内人」(庄内地方出身の人)の著作を集めて林博士に贈り、林博士から改めて鶴岡市立図書館に寄付して「林博士記念文庫」を創設することで決着をした。そして、この顕彰運動を邁進させるため佐久間佑生編『林医博を表彰する』(株式会社羽陽社、1964年)が刊行され、巻頭には横須賀市の長野正義市長(1900-2000)や鶴岡市の足達兼一郎市長(1914-1980)からの寄稿文を掲載している³⁵。こうした林博士の顕彰運動が実を結び、昭和39年(1964)10月19日には鶴岡商工会館3階において「林博士記念文庫贈呈式」が挙行された。さらに20日には林博士の母校である鶴岡南高校(現・県立致道館高等学校)で記念講演会が実施され、聴講者は800名を超えた³⁶。その後、26日に鶴岡市内を発して横須賀市の自宅に帰宅したが、式典に対する礼状の筆を執ることも叶わないほど体調が悪化したため11月15日に千葉大学病院へ入院。そのまま退院することなく、翌12月12日午前8時50分、同病院にて胃癌のため67歳で死去する³⁷。林博士の遺体は、その遺言により放射線障害研究のための献体として千葉大学病院において解剖が行われた³⁸。

林博士臨終の直前にあたっては、その死期が迫っていることを察した横須賀市や鶴岡市の友人知己などから「林博士の功績に感謝し、政府に叙勲の恩典を上申する運動」が進められた。その結果、12月11日午前4時に閣議決定、同日午後5時半に宮内庁において勲四等旭日小綬章伝達の御裁可があり、午後7時に神奈川県庁において神奈川県知事より横須賀市長に伝達式を行うという「スピード叙勲」となった³⁹。その後、横須賀市助役らは林博士が入院する千葉大学病院へ赴き、午後10時過ぎに病床にある林博士へ勲章を手交した。「林博士は、この栄ある叙勲の恩典に浴するため、苦痛を耐え忍んでモルヒネ注射をせずに、昏睡状態から免れるように覚醒されていたというのが、憔悴し切ったその姿にもかかわらず、一語、また一語と丁寧に、「有難うございました」「ご苦労さまでした」とはつきり答えられた⁴⁰」という。勲章伝達から数時間後、林博士は息を引きとることとなる⁴¹。

林博士の死去から3日後の昭和39年(1964)12月15日、横須賀市米ヶ浜通りの横須賀医師会館で林博士の告別式が挙行された。この告別式では、「その行列が延々と二時間も続いたのであるから、参列者の総数は、二千人を超えたとおもわれる。(中略)この間、葬儀は仏師の読経が始められ、次に横須賀市長の弔辞をはじめ、十数名より弔辞が捧げられ、それを終つて各地から寄せられた弔電の披露があつたが、一般の会葬者の焼香は、止むを得ず座席に着いたまま、隣りから隣りと香炉を廻して済ませるという状態である⁴²」と生前の林博士を慕う多くの参列者がその死を悼んだ。そして、昭和40年(1965)11月20日、林博士

の遺骨は自宅のある横須賀市から故郷鶴岡市へと移され、菩提寺である極楽寺の墓所へと納骨された⁴³。

（４）林博士の遺徳

林博士の死を惜しむ声は横須賀市民に広がる。例えば、昭和 40 年（1965）1 月、横須賀市医師会は『横須賀市医師会報』No.28 において横須賀市医師会会長三上四郎博士の「弔辞」をはじめ林博士の功績と遺徳を称える特集号を発行するなど、「林博士に関係あった各方面の雑誌には、それぞれの立場から一せいに博士の遺徳と、その功績をたたえて報道した⁴⁴」。その反響は拡大し、市民の世論となって林博士の遺志を具体化することとなる。それが昭和 40 年（1965）10 月に横須賀市汐入町に開館した社会福祉センターである。「博士が生前にもっとも熱心に奔走していた身体障害者並びに肢体不自由児に対する福祉施設を実現しようという動きが関係団体から抬頭し、市当局もこれに呼応して、現在では、他府県に余りその例を見ない進歩した社会福祉機関が設立されるにいたった⁴⁵」とされる。この一事について、前述の佐野義昭氏（横須賀市身体障害者連合会長など歴任）も「林博士の指導のもとにやって成功した」仕事の一つとして社会福祉センターの建設を挙げている⁴⁶。

また、昭和 40 年（1965）11 月には、当時横須賀市深田台に住む主婦が兄（浦賀ドック病院勤務）から見せられた林博士の特集（佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社発行））に深い感銘を受け、「博士の偉大な人間愛を通して目の不自由な人たちを励ましたい⁴⁷」と、林博士の一周忌を目途に同書を点訳して横須賀市および鶴岡市の図書館へ寄贈するなど博士の遺徳は横須賀市民に浸透していった。

以上、林博士の生涯についてその経歴を中心に紹介した。次節において、当館が所蔵する林博士関係史料について紹介したい。

2. 当館所蔵の林博士関係史料

本節では当館が所蔵する林博士に関する史料の翻刻を掲載することで、その内容を紹介する。本節で掲載した史料の概要については【表 3】を参照頂きたい。なお、当館が所蔵する林博士の胸像（石膏像）については杏沢耕介氏の論考を参照頂きたい⁴⁸。

【凡例】

- ・ 原本は縦書きだが、本紀要書式の都合により横書きに改めた。
- ・ 紙幅の都合により本文の改行は行わずに表記した。
- ・ 原則として変体仮名は平仮名に改めた。
- ・ 原則として旧字は新字に改めた。
- ・ 縦書きで二字以上の繰り返しを示す「く」は、原文のまま表記した。
- ・ 句読点は必要に応じて翻刻者が補った。

・住所は大字までの記載とした。

①大正 8 年（1919）5 月 15 日付「卒業証書（千葉医学専門学校医学科）」

卒業証書



山形県士族

林信雄

明治三十年四月八日生

千葉医学専門学校規定ノ医学科ヲ修メ、正ニ其業ヲ卒ヘタリ、仍テ之ヲ証ス

大正八年五月十五日

千葉医学専門学校長正四位勲二等医学博士三輪徳寛



第一八〇九号

②昭和 5 年（1930）4 月 18 日付「学位記（医学博士）」

学位記

山形県

林信雄

右者論文ヲ提出シテ学位ヲ請求シ、本学教授会ノ審査ニ

合格シタリ、仍テ大正九年勅令第二百号学位令ニ依リ、茲ニ医学博士ノ学位ヲ授ク



昭和五年四月十八日

千葉医科大学

第五八号

③昭和 23 年（1948）11 月 10 日付「（レントゲン科医長任命状）」

技術吏員 林信雄

兼ねてレントゲン科医長を命ずる



昭和二十三年十一月十日

横須賀市役所

④昭和 27 年（1952）3 月 4 日付「（横須賀市立横須賀保健所長任命状）」

技術吏員 林信雄

兼ねて横須賀市立横須賀保健所長を命ずる



昭和二十七年三月四日

横須賀市役所

⑤昭和 27 年（1952）10 月 29 日付「感謝状（本校五代後援会長として本校児童の教育に多大の御援助につき）」

感謝状

林信雄殿

貴殿は本校五代後援会長として本校児童の教育に多大の御援助下さいました、茲に本校創立八十周年記念日に際し、その御功績に対して記念品を添え感謝の意を表します

昭和廿七年十月廿九日

豊島小学校創立八十周年記念会長岡本傳之助印

⑥昭和 29 年（1954）5 月 25 日付「表彰状（多年にわたり鋭意公務に従事しその功績顕著にしてまことに他の模範とするに足る依て自治功労章を贈るにつき）」

表彰状

横須賀市技術吏員

林信雄

右は多年にわたり鋭意公務に従事し、その功績顕著にしてまことに他の模範とするに足る、依てここに自治功労章を贈りこれを表彰する

昭和二十九年五月二十五日

関東市長会長

八王子市長 小林吉之助印

⑦昭和 30 年（1955）10 月付「委嘱状（第 10 回国民体育大会秋季大会野球競技委員の委嘱につき）」

委嘱状

今回第十回国民体育大会秋季大会を十月三十日より十一月三日まで神奈川県において開催することになりました、つきましては貴下を野球競技委員 御委嘱申し上げたいと存じますので御多忙の折誠に恐縮ですが御承諾下され、大会のために御協力下さるようお願いいたします

昭和三十年十月 日

第十回国民体育大会

会長 東龍太郎印

林信雄殿

⑧昭和 31 年（1956）3 月 25 日付「表彰状（社会体育の発展に貢献につき）」

表彰状

林信雄

常に社会体育の振興に意を用い、献身そのあい路を克服して斯道の発展に貢献されたその功績は誠に顕著であります、よって記念品を贈りこれを表彰します

昭和三十一年三月二十五日

神奈川県知事 内山岩太郎印

⑨昭和 31 年（1956）5 月 3 日付「表彰状（社会福祉の増進と本県保健衛生の向上に寄与した功績につき）」

表彰状

横須賀市深田台 []

林信雄

明治三十年四月八日生

資性温厚にして早くから保健衛生事業に専念し、永年にわたりレントゲン診療に身を捧げ一身を犠牲にして保健衛生の向上に貢献し特に身体障害者後援会長として社会福祉の増進と本県保健衛生の向上に寄与した功績は誠に大である、よって神奈川県表彰規程により記念品を贈りこれを表彰する

昭和三十一年五月三日

神奈川県知事内山岩太郎印

⑩昭和 32 年（1957）10 月 19 日付「表彰状（常に体育の振興に意を用いられ献身よく斯道発展に尽くされた功績は誠に顕著につき）」

表彰状

林信雄

常に体育の振興に意を用いられ、献身よく斯道発展に尽くされた功績は誠に顕著であります、ここに市制五十周年にあたり記念品を贈り、これを表彰します

昭和三十二年十月十九日

横須賀体育協会長 谷川武印

⑪昭和 34 年（1959）5 月 29 日付「表彰状（身体障害者の福祉のために意を用い率先して更生指導と援護とに務められましたその功績はまことに顕著につき）」

表彰状

林信雄殿

貴殿は自ら身体障害を有するにもかかわらず、これを克服して他の身体障害者の福祉のために意を用い、率先して更生指導と援護とに努められましたその功績はまことに顕著でありますので、記念品を贈り表彰します

昭和三十四年五月二十九日

神奈川県知事内山岩太郎印

- ⑫昭和 34 年（1959）6 月 20 日付「表彰状（多年にわたり身体障害者の更生援護のために努力されその福祉の増進に尽された功績はまことに顕著につき）」

表彰状

林信雄殿

あなたは多年にわたり身体障害者の更生援護のために努力され、その福祉の増進に尽された功績はまことに顕著であります、よってここに表彰いたします

昭和三十四年六月二十日

横須賀市長長野正義印

- ⑬昭和 34 年（1959）6 月 25 日付「感謝状（PTA 会長として本校教育の育成発展のため御尽力につき）」

感謝状

林信雄殿

PTA 会長として多年に亘り本校教育の育成発展のため誠心誠意御尽力を賜わり、洵に感激に堪えません、茲に謹んで感謝の微意を表します

昭和三十四年六月二十五日

神奈川県立横須賀大津高等学校長安達茂夫印

- ⑭昭和 35 年（1960）3 月 13 日付「表彰状（本市野球界の発展に寄与する所が誠に大につき）」

表彰状

林信雄殿

あなたは深く野球を愛好し、本協会の発展の為に尽力され、本市野球界の発展に寄与する所が誠に大でありますので、茲に第一回野球祭を挙げるにあたって記念品を贈呈し表彰いたします

昭和三十五年三月十三日

横須賀野球協会会長坂倉等印

- ⑮昭和 37 年（1962）12 月 25 日付「感謝状（本市職員として誠実かつ公正に職務を遂行し市政に貢献する所大につき）」

感謝状

林信雄殿

あなたは本市職員として誠実かつ公正に職務を遂行し、市政に貢献するところ大なるものがありました、このたび高令退職されるにあたり、記念品を贈り、深く感謝の意を表します

昭和三十七年十二月十五日

横須賀市長 長野正義印

- ⑩昭和 38 年（1963）10 月 27 日付「感謝状（横須賀市身体障害者後援会長として多年にわたり戦傷病者の福祉更生に尽力につき）」

感謝状

林信雄殿

あなたは横須賀市身体障害者後援会長として多年にわたり戦傷病者の福祉更生に尽力されました。その功績はまことに顕著でありますので、戦傷病特別援護法制定記念式典にあたり記念品を贈り、ここに感謝の意を表します。

昭和三十八年十月二十七日

横須賀傷痍軍人会会長 井坂義夫印

- ⑪昭和 39 年（1964）12 月 1 日付「感謝状（社会福祉事業に積極的に協力され福祉の進展に寄与につき）」

感謝状

あなたはよく社会福祉事業に積極的に協力され、福祉の進展に寄与されましたので、その功績に対し感謝の意を表します

昭和三十九年十二月一日

横須賀市社会福祉協議会長藤原宗夫印

- ⑫昭和 40 年（1965）5 月 16 日付「感謝状（身心障害児教育施設海風学園のためにもつねにご配慮下されにつき）」

感謝状

先生はいつも身体障害者の福祉を思いたまい、そのために永くご敢闘なさいました。そして身心障害児教育施設海風学園のためにも、つねにご配慮下され、学園のため、園児のため、あらゆるご配慮を煩わしました先生の聖く貴い御ねぎごとは、今実り実って海風学園七周年を迎え、日々に教育上の成果をあげております。先生いまわのみきわに浄財ご寄贈のご遺志は今海風学園正門の門柱となって日々に園児を保護しております。

先生どうぞ安らかにおやすみ下さい。そしてこの子らのすくくと伸びゆく姿をごらん下さい。先生の貴いご遺志に感銘し、こゝに謹んで感謝状を捧げます。

昭和四十年五月十六日 海風学園長 草島時介

故林信雄先生

おわりに

本稿では、当館が所蔵する市立横須賀病院のレントゲン医師・林信雄博士に関する史料の一端について紹介を行った。本稿で紹介した史料からは市立横須賀病院の医師として、また長く横須賀市に住んだ古参の横須賀市民として幅広く社会に貢献した林博士の事績がうかがえた。これらの史料は、本市の医療や社会福祉の発展、野球を中心としたスポーツ振興の歩みとともに、その礎を築いた先人の遺志を伝える記録として貴重な史料群といえよう。なお、林博士を含む林家（旧鶴岡藩士）の史料は当館とは別に山形県鶴岡市にも寄贈されており、今後は史料群全体の調査や関係機関との連携が期待されるが、いずれも今後の課題である。

【付記】

令和6年（2024）7月、本市記者会見において市内 YRP（横須賀リサーチパーク）に診療放射線技師を養成する大学（中央医療大学）の進出が発表された。開校予定は令和9年（2027）4月である。本稿が「医聖」とも称されたレントゲン医師が本市において活躍していたことを広く伝えるきっかけになれば幸いである。

また、本稿執筆にあたっては、林信雄博士のご遺族の皆さまを始め、多くの方々にお世話になった。末筆ながら記して感謝申し上げる次第である。

¹『鶴岡が生んだ人びと』（鶴岡市教育委員会、2008年）、p98。

²林博士の症状や手指の切断歴などについては、瀬木嘉一「故林信雄博士の放射線障害歴-千葉大学内科レントゲン創始当時のこと-」（『臨床放射線』第11巻第3号別冊、1966年）を参照頂きたい。なお、当時のレントゲンの危険性については次のように述べられている。すなわち、「当時のレントゲン室の危険な状態は、同じ専門にあった瀬木嘉一博士が、こまごまと述べているように、防電撃・防X線がきわめて不完全なものでほとんど無防御といってもよいような粗末な設備の中で、電撃の危険なX線を全身に浴びながら、機械を操作するという日常であった。博士はこのようなしてX線障害をうけ、その徴候がすでにこの頃から現われ始めたのである。すなわち、昭和四、五年ごろ、博士がまだ千葉医局にいた頃から、左手の指に現われ始め、昭和八年に博士が横須賀に行かれたころは、病状が次第に増進して、左環指を中節より切断したのを手はじめに、右の手指の大部分と、左腕を二の腕から切断するまでに障害が体に喰い入ったのである。往時のレントゲンに関する設備や、機械の幼稚な状態は、いまでは想像もおよばないものがあつた。一つの例を示せば、林博士と同じようにレントゲン放射線の障害で職務に殉じた日赤病院の故大山技師の記録には次の如く記してある。「レントゲン草創時におけるレントゲン撮影に要した時間は、指が六〇秒、胸部が一八〇秒、頭部が六〇〇秒もかかった」と。」（佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社、1970年）、p80）

³前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社、1970年）。

⁴本稿では全体にわたって、①佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社、1965 年）〔昭和 39 年（1964）中に刊行した内容（佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社、1964 年）〕に加筆修正を加え、林博士の死後に改めて刊行〕、②前掲、瀬木嘉一「故林信雄博士の放射線障害歴」（『臨床放射線』第 11 巻第 3 号別冊、1966 年）、③前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社、1970 年）を参考文献としている。特に証言の引用については個別の出典とページ数を示すこととする。

⁵林家は代々庄内藩士の家筋であり、明治維新後の族籍は「山形県士族」であった。

⁶林博士の母方伯父である山本清一郎の三男で、博士にとっては従兄弟の関係にある山本善雄（1898-1978）は元海軍少将。旧制山形県立庄内中学校から海軍兵学校へ入校（第 47 期）。海軍軍人としてイギリス大使館付武官補佐官、軍務局 1 課長、海軍省軍務局長などを務める。戦後は第 2 復員局総務部長、運輸省掃海管船部長、海上保安庁顧問、海上警備隊建設準備委員などを務める。林博士の仏事儀式はすべて山本善雄の指図によって行われたとされる（秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会、2005 年）、p264 および前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社、1970 年）、p163～165。

⁷県立庄内中学校への入学については「その当時、庄内中学校に入学することは、地方少年にとって、あこがれの的となっていた。したがって、志望者が多く入学するのは至難とされ、成績不良の生徒は始めから入学試験を受けることさえも断念させられたものである。また受験するにしても大抵は、高等小学校一年の課程を修了してからで、その間みっちり試験準備の勉強をしたうえのことで、尋常六年から直ぐにはいるのは、余程すぐれた優等生だけに限られていた。」という（前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社、1970 年）、p28）。

⁸千葉大学医学部の歴史については、小林龍男「医専門時代」（『千葉大学医学部八十五年史』（千葉大学医学部創立八十五周年記念会、1964 年））および鈴木正夫「大学時代 I」（同左）を参照頂きたい。

⁹林博士が修学のため故郷を出るにあたって、その留守宅を作男一家に預け、その際には気前よく作男一家に財産を分与したという。こうした縁から作男一家の人たちは林博士に感謝の気持ちを抱き、千葉大学病院で息を引きとるまで報恩の看護にあたったという（（前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社、1970 年）、p18～19）。一方で、博士の生家については後年「天保時代の慈善家、鈴木今右衛門の住んでいた住家だということから、これを鶴岡の史跡として保存しようという案が、当時の教育家によって提案され、林博士もこれを公共の福祉に添うものとして、その提唱を尊重し欲得を超えて町民の要望にこたえ、生家を今右衛門の後裔と称する血縁者に譲ったのに、それがどうしたことか、途中からあいまいになって実行」されることはなかった（前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社、1970 年）、p44～47）。

¹⁰林博士の所属した「第二内科教室」の歴史については、斎藤十六「第二内科教室史」（前掲、『千葉大学医学部八十五年史』（千葉大学医学部創立八十五周年記念会、1964 年））に詳しい。

¹¹後年、放射線医学者の瀬木嘉一（1897-1974）との共著という形で浦野多門博士に関する回顧が発表されている（瀬木嘉一・故林信雄「浦野多門治博士の追憶とその障害-京大中央レントゲン室創始当時のこと-」（『臨床放射線』第 12 巻第 1 号、1967 年）、p71～74）。

¹²論文の内容については千葉医学会編『千葉医学会雑誌』（第 8 巻第 2 号、1930 年）、p40 に要旨が掲載されている。

¹³横須賀市史編纂委員会編『横須賀市史』（横須賀市役所、1957 年）、p1118～1119。

¹⁴「市立横須賀病院長井分院」とは、市内長井町にある旧横須賀海軍砲術学校の校舎を転用した市立横須賀病院の分院であり、昭和 23 年（1948）2 月 5 日に開院式を行い直ちに市民の診療に従事した。診療科目は内科・外科・婦人科の三科目であるが、近隣には他に病院もないため利用者も多く、昭和 29 年（1954）には入院患者は 1 日平均 35.6 人、外来患者は 1 日平均 54 人であった（前掲、横須賀市史編纂委員会編『横須賀市史』（横須賀市役所、1957 年）、p1119）。

¹⁵「市立横須賀病院野比臨海療養所」とは、市内野比にあった旧海軍対潜学校野比第一実習所の建物を改造のうえ転用したものであり、昭和 31 年（1956）8 月 27 日より業務を開始した（前掲、横須賀市史編纂委員会編『横須賀市史』（横須賀市役所、1957 年）、p1119）。

¹⁶前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）、p109～110。

¹⁷前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）、p110。

¹⁸林博士の評判は次第に病院内外に広がり、林博士が街中に現れるとあちらこちらから声をかけられる状況であったという。これに対して林博士もその都度これに応じていたので定刻までに目的地にたどり着かないということがあったという。よってこれを「林時間」と称して、関係者の間では名物となっていた。このことについて市立横須賀病院長洲崎敬三博士は「横須賀に林時間というのがある。それは、林先生が何の会合にも定刻に顔を出したことがなく、必ず遅れて来ることをいっているのである。それは、林先生が時間にルーズなのではなく、先生が非常に顔が広いので途中で必ず誰かに声をかけられ、何か頼まれることが多く、それを断わり切れずについて立ち停って時間を費し、遅刻するというのが実情であったからである。『遅れまして相済みませんと、例の声でニコニコした顔で入ってこられる』こんな情景は、横須賀の誰もが知っていることであろう。それで遅れてけしからんと、博士に小言という人が一人もいない。」（前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）、p110）と述べている。

¹⁹横須賀市身体障害者後援会の仕事については「障害手帳の交付に対する援助、障害者の団結、障害者の更生相談（法律・医療・経済・家庭・職業等）、障害者の団結、障害者に対する社会的啓蒙、障害者団体に対する資金援助等」など多岐にわたっていた（佐野義照『私のあゆみ』（私家版、1968年）、p69）。

²⁰佐野義照氏は、大正12年（1923）5月、横須賀海軍工廠工員として勤務中に「指導していた見習工員のつまらない不注意」から脚の神経を切断するほどの大けがを負い、肢体不自由となる。戦後はクリーニング業を営むかたわら、横須賀市身体障害者協会会長、横須賀市身体障害者連合会長などを歴任。昭和37年（1962）5月には「障害を克服して自立更生した」と横須賀市長から表彰を受け、昭和43年（1968年）5月には「昭和四十一年十五周年記念式典に海上自衛隊発足以来防衛友の会理事として隊内厚生福祉に協力した」と神奈川県知事から表彰されている（前掲、佐野義照『私のあゆみ』（私家版、1968年））。

²¹前掲、佐野義照『私のあゆみ』（私家版、1968年）、p69。また、横須賀市身体障害者連合会（のち障害者団体連絡協議会）の結成自体についても「博士のあつせんによって結成」されたと記している（前掲、佐野義照『私のあゆみ』（私家版、1968年）、p69～70）。

²²「横須賀市基督教社会館」の活動については、社会福祉法人横須賀基督教社会館編『横須賀キリスト教社会館 60年の歩み 1946～2006』（筒井書房、2006年）参照。

²³前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）、p133。

²⁴林博士の性質について佐藤伊吉博士（千葉大学名誉教授）は、「林博士は、物質にも地位にも、また名声にも全く無欲の人であった。身を持すること極めて謹厳で、他人には反対に寛大謙譲であって、頼まれれば損得を超えて親切に面倒を見るという態度だから、博士の私生活は簡素であり、その身边は洗ったように清貧であった。繰り返し述べるが、博士が住んでいた横須賀の居宅はといえば、根だが弛んで柱は傾き、戸を締めても隙間が空いて風とうしがよく、廊下の板敷や戸板の表面は、雨露に蚕食されて木目が隆起し、床や畳にはデコボコと起伏が生じていた」と述べている。また、「博士のこのような住家の状態をみかねて、日ごろ博士と親しく交わっていた元文伊一郎博士（※横須賀医師会医師、林博士の葬儀副委員長を務める）や、関正昭博士（※「林博士の後輩で、師弟関係にあった」医師）が発起人となって、林博士に家を新築して進呈する計画が発起され、昭和36年の春には、計画実行のため会合を催し、五、六十人の賛成者があって幸先よい第一歩を踏み出したというのが、この美挙は博士の逝去によってついに実現を見ないで立ち消えになった」という（前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）、p112）。

²⁵前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）、p68。

²⁶横須賀に野球競技がもたらされたのは、大正時代初期であったという。その後、大正10年（1921）に横須賀野球協会が結成されて活動が行われたが、昭和16年（1941）12月に開戦した太平洋戦争の激化により協会の活動は停止した。その後、「終戦の世情混乱のなか、野球協会再建に立ち上がったのは林信雄氏を中心にして集まった戦前の生き残りの指導者たちであった」（『横須賀市体育協会史』（横須賀市体育協会、1985年）、p8～13）。

²⁷前掲、『横須賀市体育協会史』（横須賀市体育協会、1985年）、p20～23、p120～127。

²⁸前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）、p94～95。

²⁹前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）、p64～65。なお、佐藤伊吉博士は山形県鶴岡市出身で、庄内中学校より千葉医学専門学校に入った林博士の後輩にあたる。

³⁰「横須賀市立病院焼く」（『神奈川新聞』、昭和37年（1962）3月18日付）。

³¹田中一松（1895-1983）は、明治28年（1895）12月23日に山形県鶴岡市に生れる。庄内中学校を卒業後、大正7年（1918）9月には東京帝国大学文学部に入学、同12年（1923）3月美学美術史学科を卒業。以後、「終始一貫してわが国文化財保護の行政に従事し、昭和28年（1953）11月から同40年（1965）3月まで東京国立文化財研究所長を務めている。「主として絵画作品の実査研究」を行い、「その研究領域は広範にわたり、仏教美術をはじめ、倭絵、絵巻物、水墨画、宋元画、宗達・光琳派、南画」にまで及んだ。そして、「その学識は多くの研究者を養成、指導し、その学恩に浴するものは少なくない」とされる。昭和58年（1983）4月19日、老衰のため死去。享年87。（東京国立文化財研究所『日本美術年鑑』（大蔵省印刷局、1986年）、p301～302）。

³²例えば、当時の庄内出身者の人物名鑑にも「こぞって起こそう—林信雄医博の偉業を顕彰する運動を！」（『現代庄内人物名鑑続刊 光芒を曳く人々』（株式会社羽陽社、1963年）、p21～28）と題する記事には「林医博の功績を広く社会から認められ、仁術者として世の尊敬の的となることの一日も早きを冀（※冀）うものであるが、それがため、われわれはこぞって博士の偉業を顕彰する運動を起こすべく、声を大にして同郷人をはじめ、社会一般の人々に呼び掛けるものである」と記され、「予め賛意を表され、署名された方々」として田中一松をはじめ、土地の名士や林博士の関係者ら38名もの名前が列記されている。

³³前掲、佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社、1965年）、p1。

³⁴前掲、佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社、1965年）、p3。また、「博士の篤学と徳性は郷里の人々の憧憬の的となり、表彰の企てが澎湃として起こった。そして昭和37年頃より博士の寿像を贈るとの企てがあったが、博士の性格として之を甘受する筈はなく固辞せられたのである。」との記述もある（前掲、瀬木嘉一「故林信雄博士の放射線障害歴-千葉大学内科レントゲン創始当時のこと-」（『臨床放射線』第11巻第3号別冊、1966年）、p213）。

³⁵横須賀市長長野正義は「お祝いの辞に代えて」と題して次のように寄稿している。すなわち、「林先生の名は、横須賀ではかなり広く知られております。数十年にわたる市立病院のおつとめで、直接お世話になった人々ばかりではありません。先生のお仕事とお人柄が自然に、市民の間ににじんで行つたことから来ていると思われます。私が先生とおつきあひするようになってから、かなり久しく、それだけに先生を存じあげていたつもりであります。今回の表彰記念文庫の企てを通じて、先生をめぐる多数の方々にしみ通つている先生の徳の広さに、あらためて先生を見直す思いの私であります。これは私だけでなく、或いは横須賀の多数の人々においても、そうであろうとおもいます。こんどの記念文庫の創設は、先生を伝え、先生を讃えるのに、まことにふさわしく意義ぶかい企画だと思いますが、この計画を伝えきいたとき、何か心が洗われるような思いがいたしました。それと同時に、このような企てが成り立つ土地柄、すなわち、長い歴史の重厚さがにじんでいる風土を郷里にもつ先生を、うらやましくさえ思つたのであります。先生がX線の道に、その身をささげられた崇高な精神は、衆人の知るところであります。身体障害者に対する先生の献身は、当地以外にはまだ余り伝えられていないようであります。横須賀市身体障害者後援会の発足は、今から十余年前のことです。之は全く先生の発意と奔走によるものでありまして、横須賀身体障害者連合会の結成も、身障者は、自助的ではなくてはならないとする、先生の持論を旨として、先生の肝入りに発足しています。肢体不自由児父母の会、手をつなぐ親の会等も、また先生の指導にまつところが少なくありません。本市において、身体障害者のある処には、先生の影のみえないことは稀であります。今や先生は、横須賀身障者の父でもあります。先生が多くの人々に親愛懐仰されるのは、そのお仕事の高さにもよるが、そのお人柄に発するところの多いことも、世間の一致した見方です。先生の人道精神は、火を思わせるものがあります。その現われは黙々たる実行で、淡々として水のごとく自然であります。先生は与える人、いや献げる人であつて、求める人ではありません。そこには聊かも私の影がありません。それゆえに、その身辺は明るく清らかであります。私のある友人が、「もし横須賀で聖人をえらぶとしたら、林先生のごときは、第一

に指を屈される人ではないか」といつたことがあります。私はあえて「聖人」の語を用うことは、先生のためにここでは避けますが、先生の行動と風格の中には、何かそういうたものを連想させられるものがあります。この上とも先生の御健康をお祈りし記念文庫の発展を冀つてやまない次第であります。」(佐久間佑生編『林医博を表彰する』(株式会社羽陽社、1965年)、p6)。

³⁶林博士による記念講演会の内容については、前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』(株式会社羽陽社、1970年)、p240～243 参照のこと。

³⁷死亡時刻などは前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』(株式会社羽陽社)、p249 および前掲、瀬木嘉一「故林信雄博士の放射線障害歴-千葉大学内科レントゲン創始当時のこと-」(『臨床放射線』第11巻第3号別冊、1966年)を参照。

³⁸解剖の結果は、竹内勝・木村英夫「慢性レントゲン皮膚炎の剖検例(畏友林信雄博士を想う)」(『皮膚科の臨床』第9巻第10号、1967年)として発表された。

³⁹前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』(株式会社羽陽社)、p199～207 参照。

⁴⁰前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』(株式会社羽陽社)、p207。

⁴¹林博士に対する叙勲運動については、「林君は元々無欲の人だから、勲章などは要らないよ、迷惑に思っているかもしれない」との意見も出ていた(前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』(株式会社羽陽社)、p206)。

⁴²前掲、佐久間佑生編『林医博を表彰する』(株式会社羽陽社、1965年)、p40～41。

⁴³極楽寺(山形県鶴岡市)に所在する林博士の墓誌には田中一松により、その事績が次のように刻まれている。すなわち、「林信雄氏墓誌」「医学博士林信雄氏は明治三十年四月八日鶴岡市新土町に生れ、庄内中学卒業後、千葉医専に学び、大正八年同校を卒業、この後母校の大学昇格に伴い、同大学附属病院にレントゲン室を創設して診療に当り、後横須賀市立病院内科兼レントゲン医長等に歴任され、更にこれらの重職在任中、横須賀市身体障害者後援会、同父母の会の会長として尽力さるところまた多大であった。右の経歴に明らかな如く、博士はレントゲンの研究において画期的な診療の分野開拓の第一線に挺身、以来実に四十余年の永きにわたり終始社会民衆の保健診療のために尽瘁されたが、当時レントゲンの防護設備の不完全なために、放射能の障害を受けて遂に左腕を失い、更に病患は内臓にも及んだ。しかし博士は天職に安じて聊かも屈するところなく常に斯学の進歩を人間愛の至情に献身的な情熱を傾け尽し、従容として永眠された。時に昭和三十九年十二月十二日、世寿六十七歳、臨終に際し従五位勲四等旭日小綬章を授与された。このたび林家の墓碑成るに当り、同郷の諸君を代表して、ここに博士の略歴を録し、長く追慕の記念とする次第である。国立文化財研究所長 田中一松」とある。

⁴⁴前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』(株式会社羽陽社)、p231。

⁴⁵前掲、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』(株式会社羽陽社)、p207。

⁴⁶前掲、佐野義照『私のあゆみ』(私家版、1968年)、p70～71。なお、佐野義照は林博士の死について「博士の直接の死因はガンであったときくが、その因つて来たところは、多年にわたるレントゲン操作によると伝えられている。身をもって医療に殉ぜられたわけであるが、博士がここ十余年間われわれ身障者の福祉のために碎身された事績も、また決してこれに劣らぬもので、博士の死はわれわれにとっては、文字通り、身障者の父逝くの想いであった」(前掲、佐野義照『私のあゆみ』(私家版、1968年)、p71)、「(※横須賀市身体障害者連合会会長時代の思い出の一つとして)横須賀身体障害者の父といわれる(身体障害者後援会長、身障者連合会結成の指導者、肢体不自由児父母の会々長であった)林信雄博士の逝去にあってがっくり、そして涙をしばったことなどが、挙げられます。」と記している(佐野義照『続私のあゆみ』私家版、1984年)。

⁴⁷「故林医博の顕彰特集 ゆかりの横須賀で点訳」(『朝日新聞』山形版、昭和40年(1965)11月29日付)。

⁴⁸杓沢耕介「『林信雄先生像』の作者・川村栗について」(『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第69号、横須賀市自然・人文博物館、2025年)。なお、前述の通り林博士顕彰運動の方法として胸像の制作が提案されたが、実現しなかった。

【表1】林信雄博士関連年表（太字は横須賀市での主な職歴）

和暦	西暦	月	日	経歴
明治30	1897	4	8	山形県鶴岡市新市町乙9番地に生れる。
明治43	1910	4	-	山形県立荘内中学校へ入学。大正4年（1915）3月、同校卒業。
大正4	1915	9	-	千葉医学専門学校入学。大正8年（1919）5月15日、同校卒業。
大正8	1919	5	16	県立千葉病院第二内科部（柏戸留吉教授）専攻生を許可される。
大正8	1919	11	15	医師免許取得。
大正10	1921	1	22	県立千葉病院医員となる。
大正10	1921	2	10	内科レントゲン学研究および千葉医学専門学校の大学昇格準備のため京都帝国大学医学部中央レントゲン室（浦野多門治講師）へ出張を命じられる。
大正11	1922	5	31	京都から帰学。千葉医学専門学校附属医院に内科レントゲン室を創設し、勤務。
大正12	1923	4	1	千葉医学専門学校が廃止となり、『千葉医科大学』に昇格。引き続き内科レントゲン室に勤務。
大正12	1923	6	1	千葉医科大学を辞し、名古屋株式会社愛知理学療法所長に就任。
大正13	1924	12	11	愛知理学療法所は名古屋市医師会に合併し、理学療法部治療部と名称変更。治療部長となる。
大正15	1926	6	-	名古屋医師会を辞任。 千葉医科大学助手となり、内科学教室レントゲン部に勤務（第二内科柏戸教授主管）。
昭和5	1930	4	18	博士論文「アスナールの中樞神経作用」で医学博士の学位受領。
昭和8	1933	5	-	千葉医科大学講師となる。
昭和8	1933	10	21	千葉医科大学講師を辞任。
昭和8	1933	11	23	横須賀市立横須賀病院医員に就任。内科医長兼レントゲン科医長となる。
昭和12	1937	-	-	左環指黒色角化癌切除。次いで中節（左手薬指中節骨）より切断。
昭和16	1941	12	-	市立横須賀病院内科医長を辞し、レントゲン科医長専任。
昭和18	1943	5	-	左示指（左手人差し指）基節より切断。
昭和19	1944	1	25	横須賀市小児保健所兼務。
昭和21	1946	-	-	左中指（左手中指）基節より切断。
昭和23	1948	1	15	市立横須賀病院長井分院長を命ぜられ、レントゲン科（のち放射線科）医長兼務。
昭和24	1949	10	-	市立横須賀保健所長併任。同27年（1952）5月12日、同所長併任解除。
昭和25	1950	10	-	右中指（右手中指）基節中央より切断。
昭和27	1952	5	-	右示指（右手人差し指）基部中央より切断。
昭和29	1954	1	-	右環指（右手薬指）基部より切断。次いで左環指（左手薬指）基部より切断（昭和12年（1937）手術指残部）。
昭和31	1956	5	-	市立横須賀病院長井分院長を辞任。市立横須賀病院（本院）放射線医長専任。
昭和33	1958	5	-	市立横須賀病院野比臨海療養所長、市立横須賀病院（本院）放射線科医長併任。
昭和34	1959	-	-	右小指（右手小指）基節より切断。
昭和35	1960	12	-	左小指（左手小指）基節より切断。
昭和36	1961	11	-	左前腕下1/3より切断。
昭和37	1962	3	-	市立横須賀病院焼失。
昭和37	1962	12	25	本職および併任辞職。同日、胃癌手術。
昭和38	1963	4	1	市立横須賀病院野比臨海療養所の囑託となる。5月31日、同所囑託を解除。
昭和38	1963	12	-	故郷鶴岡の有志により「林博士表彰記念文庫創設委員会」が発足し、林博士の顕彰運動が始まる。
昭和39	1964	-	-	佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社発行）が林博士の表彰運動邁進を目的に刊行される。巻頭の横須賀市長長野正義「お祝いの辞に代えて」をはじめとして、関係諸名士による林信雄博士に関する寄稿文が掲載される。
昭和39	1964	10	19	「林博士記念文庫」贈呈式が鶴岡市商工会館で行われる（林博士夫妻の賓客として出席）。 翌20日には鶴岡南高等学校において講演を行う（同校生徒500名ほか他校および一般聴講者を加えて総数800名余の聴講者）。鶴岡市長招待の昼餐会や旧庄内中学校時代の同窓会などに参加し、10月27日に横須賀に帰郷。
昭和39	1964	11	15	胃癌の症状悪化により千葉大学病院へ入院。病状が日増しに悪化。
昭和39	1964	12	11	午後10時過ぎ、病床において勲四等旭日章の叙勲を受ける（横須賀市助役が手交）。なお、本叙勲は林博士の功績に感謝し、政府に叙勲の恩典を上申するという横須賀市の有志らによって展開され、異例のスピード叙勲となったもの。のちに更に従五位を贈られる。
昭和39	1964	12	12	午前8時50分、林博士死去（67）。戒名は「謙徳院に誉博道信雄居士」。なお、林博士の遺言により遺体は「放射線障害」研究の進展のため献体となる。同日午後には千葉大学医師の執刀のもと遺体の解剖が行われる。
昭和39	1964	12	15	午後2時より横須賀医師会館（メッセ）において告別式。 会場には長野横須賀市長をはじめ数百基の花輪、参列会葬者の数は優に2000人を超えていたとされる。
昭和40	1965	1	-	横須賀市医師会が発行する「横須賀市医師会報」（No28）において「林信雄先生追悼集」が掲載される。追悼集には横須賀市医師会会長三上四郎氏、毎日新聞横須賀支局長漆畑堅治氏、吟海生氏、医師岡正昭氏が寄稿。
昭和40	1965	10	-	横須賀市汐入町に「社会福祉センター」開館（身体障がい者および肢体不自由児に対する福祉施設の設置は林博士の念願）。
昭和40	1965	11	-	佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社発行）に感銘を受けた横須賀市点訳奉仕会員の主婦が同書を1年がかりで点訳し、横須賀市および鶴岡市に寄贈。
昭和40	1965	11	20	極楽寺（山形県鶴岡市八日町）において、林信雄博士の納骨式が行われる。納骨式には、横須賀市長代理や鶴岡市長、母校千葉大学の教授のほか遺族、親類、子弟ら70名が参列。
昭和42	1967	10	-	放射線皮膚障害の事例として林信雄先生の解剖所見が竹内勝・木村英夫「慢性レントゲン皮膚炎の剖検例（畏友林信雄博士を想う）」（『皮膚科の臨床』第9巻第10号11月号）として発表される。
昭和45	1970	-	-	佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）が刊行される。

出典：「学歴及び職歴」（佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社、1965年））、潮木嘉一「故林信雄博士の放射線障害歴」（『臨床放射線』第11巻第3号別冊、1966年）、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）などをもとに作成。なお、本年表において一部当館所蔵の辞令と日付（月日）が合わない箇所があるが、林博士生前に執筆され、経歴が体系的にとまどられた「学歴及び職歴」（佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社、1965年））、潮木嘉一「故林信雄博士の放射線障害歴」（『臨床放射線』第11巻第3号別冊、1966年）、佐藤保太郎監修・佐久間佑生編『医聖・林信雄伝』（株式会社羽陽社）の記載を優先して表記することとし、詳細は後日の検証を期したい。

【表2】林信雄博士の各種委員歴（医師会、健保関係、体育、学校、身体障害者関係）

就任時期	委員名	備考
昭和22年（1947）4月～昭和24年（1949）3月	横須賀市医師会理事	
昭和26年（1951）5月～昭和30年（1955）4月	神奈川県社会保険診療報酬支払基金審査会委員	
昭和13年（1938）4月	横須賀市野球協会副会長	
昭和21年（1946）4月	横須賀市野球協会会長	のちに横須賀市野球協会顧問。
昭和21年（1946）	横須賀卓球協会会長	
昭和35年（1960）10月	横須賀市ハンドボール協会会長	昭和39年（1964）時点で現任。
昭和23年（1948）10月～昭和26年（1951）3月	横須賀市立豊島小学校PTA会長（初代）	
昭和23年（1948）10月～昭和26年（1951）3月	横須賀市立不入斗中学校PTA会長（初代）	
昭和27年4月（1952）～昭和29年（1954）3月	横須賀市立第一高等学校PTA会長	
昭和30年4月（1955）～昭和34年（1959）3月	神奈川県立横須賀大津高等学校PTA会長	
昭和29年（1954）1月	横須賀市身体障害者後援会会長	昭和39年（1964）時点で現任。
昭和33年（1958）9月	横須賀市肢体不自由児父母の会会長	昭和39年（1964）時点で現任。
昭和36年（1961）11月	全国肢体不自由児父母の会評議員	昭和39年（1964）時点で現任。
昭和38年（1963）11月	神奈川県肢体不自由児父母の会連合会常任幹事	

出典：「学歴及び職歴」（佐久間佑生編『林医博を表彰する』（株式会社羽陽社、1965年））、『横須賀市体育協会史』（横須賀市体育協会、1985年）をもとに作成。

【表3】顕彰掲載史料一覧

No.	和暦	西暦	月	日	表題（内容）	差出・作成→受取	形状	史料の概要
1	大正8	1919	5	15	卒業証書（千葉医学専門学校医学科）	千葉医学専門学校長正四位勲二等医学博士三輪徳寛（角印）→山形県士族林信雄	状1	千葉医学専門学校医学科の卒業証書。
2	昭和5	1930	4	18	学位記（医学博士）	千葉医科大学（角印）→山形県林信雄	状1	医学博士の学位記。
3	昭和23	1948	11	10	（レントゲン科医長任命状）	横須賀市役所（角印）→技術吏員林信雄	状1	市立横須賀病院レントゲン科医長の任命辞令。
4	昭和27	1952	3	4	（横須賀市立横須賀保健所長任命状）	横須賀市役所（角印）→技術吏員林信雄	状1	横須賀市立横須賀保健所長の任命辞令。
5	昭和27	1952	10	29	感謝状（本校五代後援会長として本校児童の教育に多大の御援助につき）	豊島小学校創立八十周年記念会長岡本博之助（角印）→林信雄殿	状1	豊島小学校創立80周年記念日に後援会長を務めたことに対する感謝状。
6	昭和29	1954	5	25	表彰状（多年にわたり親善公務に従事その功績顕著にしましてことに他の模範とするに足る依て自治功労章を贈るにつき）	関東市長会八王子市長小林吉之助（角印）→横須賀市技術吏員林信雄	状1	関東市長会からの表彰。
7	昭和30	1955	10	-	委嘱状（第10回国民体育大会秋季大会野球競技委員の委嘱につき）	第十回国民体育大会会長東龍太郎（角印）→林信雄殿	状1	第10回国民体育大会秋季大会（1955年10月30日～11月3日、神奈川県で実施）にあたって、野球競技委員の委嘱状。
8	昭和31	1956	3	25	表彰状（社会体育の発展に貢献につき）	神奈川県知事内山岩太郎（角印）→林信雄殿	状1	「社会体育」の振興に寄与したことに對する神奈川県知事からの表彰状。
9	昭和31	1956	5	3	表彰状（社会福祉の増進と本県保健衛生の向上に寄与した功績につき）	神奈川県知事内山岩太郎（角印）→林信雄	状1	社会福祉の増進と本県保健衛生の向上に寄与した功績に對する神奈川県知事からの表彰状。
10	昭和32	1957	10	19	表彰状（常に体育の振興に意を用いられ献身よく斯道発展に尽くされた功績は誠に顕著につき）	横須賀体育協会会長谷川武（角印）→林信雄	状1	市制50周年にあたり、「体育」の振興に寄与したことに對する横須賀体育協会会長からの表彰。
11	昭和34	1959	5	29	表彰状（身体障害者の福祉のために意を用い率先して更生指導と援護に務めましたその功績はまことに顕著につき）	神奈川県知事内山岩太郎（角印）→林信雄殿	状1	身体障害者の福祉のために寄与したことに對する神奈川県知事からの表彰状。
12	昭和34	1959	6	20	表彰状（多年にわたり身体障害者の更生援護のために努力されその福祉の増進に尽された功績はまことに顕著につき）	横須賀市長野正義（角印）→林信雄殿	状1	身体障害者の福祉のために寄与したことに對する横須賀市長からの表彰状。
13	昭和34	1959	6	25	感謝状（PTA会長として本校教育の育成発展のため御尽力につき）	神奈川県立横須賀大津高等学校校長安達茂夫（角印）→林信雄殿	状1	大津高等学校においてPTA会長を務めたことに對する感謝状。史料の右下部破損甚大。乾電池液漏れ付着。
14	昭和35	1960	3	13	表彰状（本市野球界の発展に寄与する所が誠に大につき）	横須賀野球協会会長板倉等（角印）→林信雄殿	状1	第1回横須賀野球祭にあたり、横須賀市における野球競技の発展に寄与したことに對する表彰状。
15	昭和37	1962	12	25	感謝状（本市職員として誠実かつ公正に職務を遂行し市政に貢献するところ大につき）	横須賀市長野正義（角印）→林信雄殿	状1	高令退職にあたり感謝状。史料の右下部破損大。乾電池液漏れ付着。
16	昭和38	1963	10	27	感謝状（横須賀市身体障害者後援会長として多年にわたり戦傷病者の福祉再生に尽力につき）	横須賀傷痍軍人会会長井坂義夫（角印）→林信雄殿	状1	戦傷病者特別援護法制定記念式典にあたり、横須賀市身体障害者後援会長として多年にわたり戦傷病者の福祉再生に對する感謝状。
17	昭和39	1964	12	1	感謝状（社会福祉事業に積極的に協力され福祉の進展に寄与につき）	横須賀市社会福祉協議会長藤原宗夫（角印）→林信雄殿	状1	社会福祉事業に積極的に協力され福祉の進展に寄与したことに對する横須賀市社会福祉協議会長からの感謝状。
18	昭和40	1965	5	16	感謝状（身心障害児教育施設海風学園のためにもつねにご配慮下されにつき）	海風学園草島時介→故林信雄先生	状1	海風学園への支援に對する感謝状。林博士は死去する間際にも同学園に寄付を行う。史料の右下部破損甚大。乾電池液漏れ付着。

【図 1】市立横須賀病院医師・林信雄博士（1897-1964）



（個人所蔵・画像提供）

【図2】市立横須賀病院

(昭和29年(1954)頃撮影)



(横須賀市立中央図書館郷土資料室所蔵)

【図3】市立横須賀病院被災跡

(昭和37年(1962)撮影)



(横須賀市立中央図書館郷土資料室所蔵)

【図4】長井分院

(昭和37年(1962)撮影)



(昭和37年4月20日付『神奈川新聞』
[横須賀・湘南版] 8面より転載)

【図5】野比臨海療養所

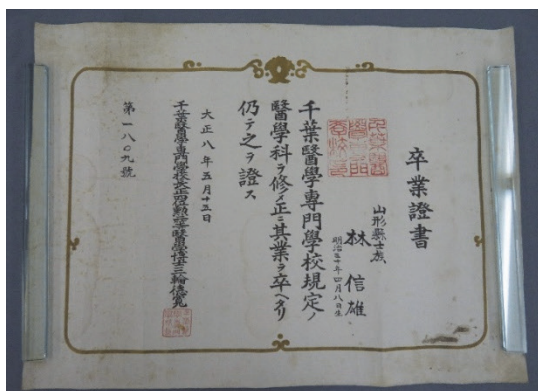
(昭和33年(1958)撮影)



(横須賀市立中央図書館郷土資料室所蔵)

【図6】卒業証書（千葉医学専門学校医学科）

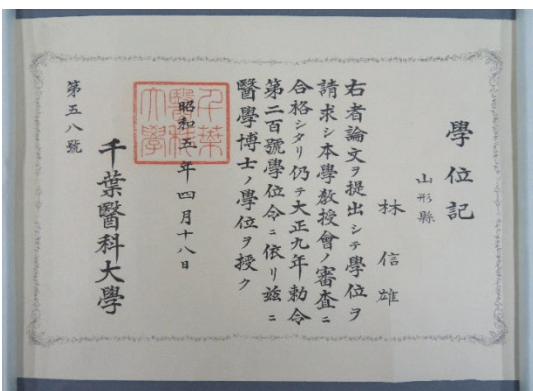
（大正8年（1919）5月15日付）



（当館所蔵）

【図7】学位記（医学博士）

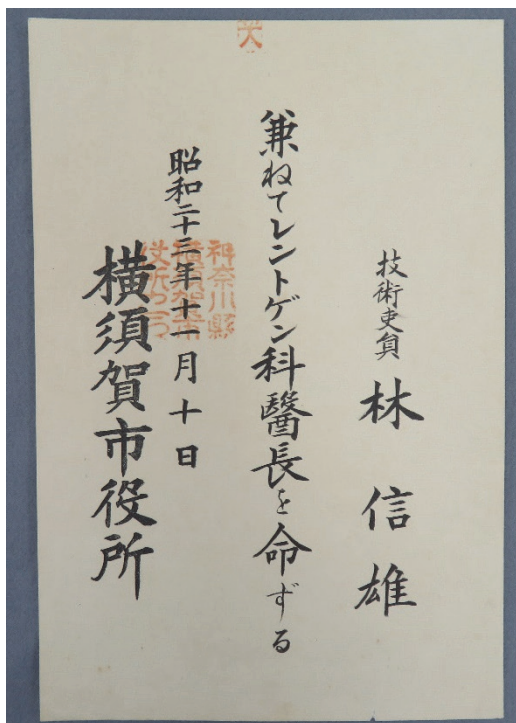
（昭和5年（1930）4月18日付）



（当館所蔵）

【図8】レントゲン科医長任命状

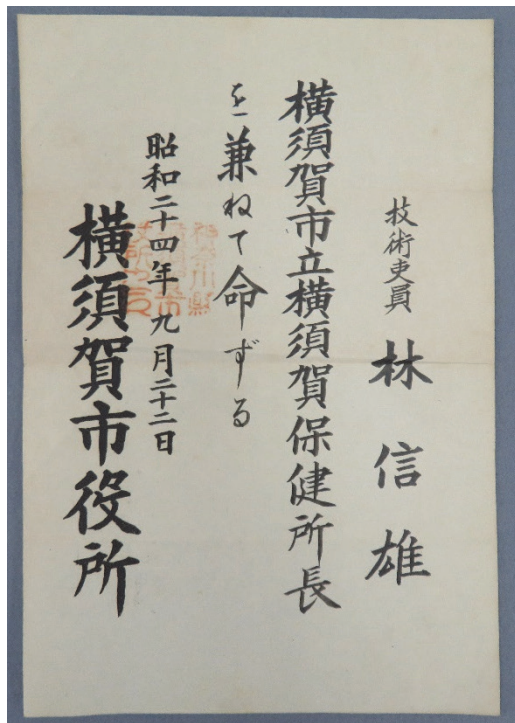
（昭和23年（1948）11月10日付）



（当館所蔵）

【図9】横須賀市立横須賀保健所長任命状

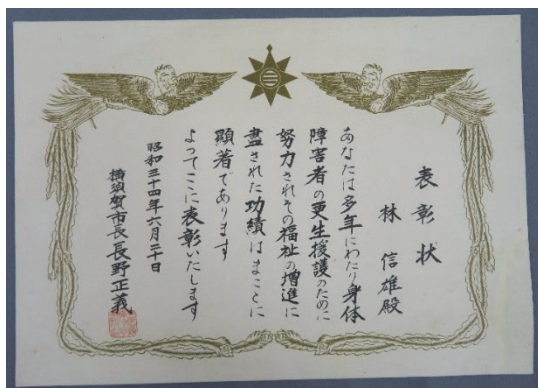
（昭和24年（1949）9月22日付）



（当館所蔵）

【図 10】横須賀市長からの表彰状

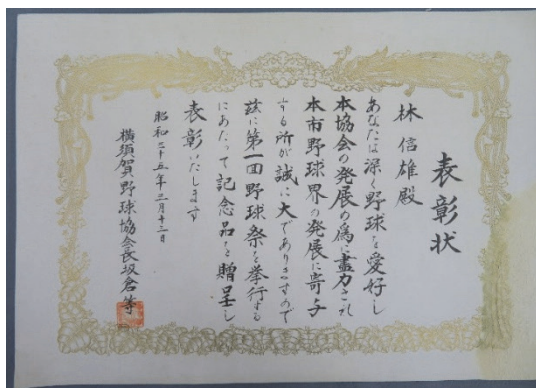
(昭和 34 年 (1959) 6 月 20 日付)



(当館所蔵)

【図 11】横須賀野球協会からの表彰状

(昭和 35 年 (1960) 3 月 13 日付)



(当館所蔵)

【図 12】林文庫記念碑



(山形県鶴岡市鶴岡公園内・筆者撮影)